

提出日：令和 3 年 3 月 5 日
所 属：生命・環境科 学部 環境科 学科
氏 名： 遠藤 治 職位： 教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

私自身、麻布大学の卒業生であり、在学中から外研生として研修した厚生省国立公衆衛生院（現厚生労働省国立保健医療科学院）も含めて、恩師・諸先輩方の薫陶を受けた。このことが就職後の公衆衛生院等での職務に反映されたと強く感じている。したがって、この自分自身の体験も踏まえて、特に自身が専門としてきた生活環境衛生分野において、本学の建学精神である「学理の討究と誠実なる実践」のできる人材養成を行いたいと考えている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
地球環境科学	環境	必	1	83
大気環境学	環境	必	2	89
環境衛生学	環境・食品	必・選	2・3	90・89
環境衛生学実習	環境	必	2	83
リサーチローテーション	環境	必	2	77
環境毒性学同実習	環境	必	3	74
環境リスク学同演習	環境	必	3	76
科学技術英語	環境	選	3	3
卒業論文	環境	選必	3・4	4・3

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

本学は東京獣医講習所を出発点とするが、時代とともに進化し、現在「地球共生系～人と動物と環境の共生をめざして～」を標榜している。

私は 2018～19 年度に環境科学科長を拝命したが、オープンキャンパス等で学科紹介の際、「人には人のお医者さん、動物には動物のお医者さん（獣医師）、そして環境には環境のお医者さん」と表現させていただいた。環境科学科の目指すべきは「環境のお医者さん」であると考えている。

医療・獣医療に様々な専門医（内科、外科、精神科など）があるように、「環境のお医者さん」にも「空気環境」「水環境」「環境分析」「環境衛生」「環境調査」「環境行政」など様々な専門分野が存在する。私は「大気環境学」で「空気環境」を、「環境衛生学」「環境毒性学・同実習」等で「環境衛生」分野を分担していると自認している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

環境科学科（環境のお医者さん）は、獣医学科（動物のお医者さん＝獣医師）や臨床検査術学科（広義で人のお医者さん≒臨床検査技師）と比べ、目標は不明確となりやすい。それゆえ昨今の社会情勢の中で、学生の自己肯定観が相対的に低いように感じる。

（学生に対して）肯定できる自己を発見してほしいと思っており、（教員として）そのきっかけを与えられる教員でありたいと念じている。

そのため重視しているのは、一言でいえば「一期一会」であり、その「きっかけ作り」として、「基本・基礎」を重要視している。

講義科目では「専門用語・略語」の正しい理解を、実習科目では「基本操作」の習得を重視している。

アクティブラーニングについての取組

「環境リスク学・同演習」の中で関本准教授や特任助教の先生方の協力を得て、グループワークを導入している。新しい試みなので中には戸惑いを隠せない学生もいるが、授業評価では一定の評価も受けているので、特に実習や演習の科目で活用したいと考えている。

ICTの教育への活用

研究室の定例ゼミを Google meet オンラインで実施した。10名程度の比較的少人数であったこともあって、有効活用できたように思う。特に4年生は卒業論文発表会が同じ形式での実施となったので、画面共有などにも慣れていて効果的であったように感じている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

2020年度は、当初より新入学生へのタブレット必携化が予定されていたので、新規アプローチとして①学理ミニテスト作成、②配布資料の見直しなどを計画していた。

そのような中で新型コロナの問題が加わり、その対策として「オンデマンド資料作成」や「対面実習の工夫」を行った。

②学生の理解度の把握（B）

学理ミニテストの導入で定期試験なしでも成績評価が可能となった。平均点は例年より上昇したが、オンラインゆえか未受講の学生への対応が難しく感じられた。（学生間の格差が大きくなったように感じている）

③学生の自学自習を促すための工夫 (B)

予習用に前年度までの配布資料を事前に学理にアップした。

また復習用に、オンデマンド授業の MP4 動画や、すべての配布資料を授業期間終了（前期なら前期終了時）まで継続して学理にアップした。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (B)

オンデマンド授業においても、時間割の時間帯に学理の「ディスカッション」機能を利用して、リアルタイムでの質疑応答の十分な時間を確保した。しかしながら活発な利用にはいたらなかった。

⑤双方向授業への工夫 (B)

上記のようなアプローチは行っているが、具体的な成果としては現れていないように感じている。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

学理でアンケート結果を逐次確認すると同時に、学理ディスカッション機能などを通じて定期的にアンケート活用を促した。

② ①の結果はどうでしたか。

サイレントマジョリティーなのか、コメント等は少なかった。

「大気環境学」については例年と比較して、総体的に評価ポイントが高かったように思う。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

2021 年度は対面とオンラインの併用となるので、対面の際に積極的な活用を促したい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

ここ数年 ICT 化に翻弄されているように感じている。確かに便利で魅力的なものだが、所詮「情報通信技術」であり、ツールのひとつでしかない。スマホは使えても必要なパソコン・スキルのない（そもそも興味すらない）学生や、自然環境問題に高い関心・意識を持つ学生（ナチュラリスト？）には、むしろアナログな対応が必要なように感じることもある。原点回帰で、多少不便でも、アナログだが個別に丁寧な対応が必要と感じている。残念ながら具体的な妙案はまだない。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

2019 年 9 月に大学連携講座の一環として県立相模原高校から 3 名の学生を引き受けた。課題は学生からの持ち込みで「果物の皮で汚れを落とす」というものであったが、後日（2020 年 3 月 18 日）行われた高大一貫協議会で県立相模原高校の担当教員から学生の意欲向上など高評価をいただいた。

県立相模原高校は、偏差値も高く、偶然であったかもしれないが、「一期一会」を標榜する

<p>者としては大変嬉しい評価であった。</p> <p>コロナ禍で難しいとは思いますが、志願者拡充の意味でも、高校との連携は不可欠に思う。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)</p> <p>可能な限り積極的に参加した。(9/8、9/28、11/9、12/23、1/13、3/3)</p>
<p>8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)</p> <p>定年まで 4 年間なので、短期目標となるが、「一期一会」を考えると、特に 3 年次以降研究室に配属された学生に対して一層丁寧な指導を心がけたい。</p>
<p>9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 2020 年度生命・環境科学部担当授業時間数の確認について (教務課配布資料)・ 授業シラバス・ FD 研修「ティーチング・ポートフォリオ作成につながるティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成ワークショップ」配布資料 (2020.11.9 および 12.23 研修資料)・ 学理授業評価アンケート・ 相模原高等学校大学連携講座レポート・ 2019 年度第 1 回高大一貫協議会資料